

学力の基礎をきたえ どの子も伸ばす研究会ニュース

NO. 365

学力研の広場

2025. 8. 9

学 力 研 発 行

常任委員長 岸 本 ひ と み

ペイペイ銀行うぐいす支店 普:3607141

ホームページアドレス <http://gakuryoku.info/>

6月14日に「ICT 教育を考える学習会」が行われました。GIGA スクール構想下での授業づくり・学級づくり・学力づくりについて話し合いました。初等普通教育段階でのデジタル化は子どもたちの全面发展にとって有害であり、それは初等普通教育の死を意味するといった問題提起が挙がりました。

ノルウェー科学技術大学のミアー教授は、「手書きで文字を学ぶには時間と労力がかかりますが、脳の成長には苦労が必要です。文字を覚えるには手書きが一番ですし、指の細かな運動や感覚を必要とすることで、脳を学習状態に開いておくことができます。キーボードやタブレットでは、脳の活動が最小化され、学習効果が高まりません。」と述べておられます。

ICT の在り方が問われている今、学力研はノート指導のよさや重要性を今後さらに発信し続けなければならないという結論に至りました。そこで、今月号の特集は「書くことを大事にした取り組み」というテーマで、たくさんの実践を紹介しています。ぜひ2学期からの取り組みのご参考にしてください。

CONTENTS

◇特集「書くことを大事にした取り組み」◇

「自分の考えが書けない」と学習が深まらない 視写することで学力をのばしていく	鈴木基久 2
書くためのスタートアップ	十川康彦 4
書くことの意味と意図を考えながら指導する重要性	加藤英介 6
「書く」ことにつながる活動	福島 尚 8
子どもたちが納得感をもって取り組めるノート指導	十川瑠都 10
	古東秀一 12

◇連載◇

「どの子も伸ばす」を本気で考える連載 82 「意欲格差」に負けない! 公立小学校へ 考える力をつけるための授業の組み立て方④語彙を増やすための授業の組み立て方②	岡本美穂 14
	荒井賢一 16
「伊丹学力研」サークル活動報告	前田昌彦 19
新井紀子著『シン読解力』(東洋経済新報社)の紹介	金井敬之 21
局長・常任委員長だより 23
学力研カレンダー 24

※深澤先生と久保先生の連載は、都合により休載させていただきます。

「自分の考えが書けない」と学習が深まらない

鈴木基久

今年度2年生を担任している。4月にひらがな・かたかなの50音表のチェックと多層指導モデルMIMのアセスメントで実態調査をした。前任校で担任した2年生に比べて、今年の学級は書けない子が多いと分析した。だから、あせらずにこつこつと計画的にレベルアップを図っていくことを考えた。

生活科では、4月に春探しで見つけたものや5月に野菜の観察をワークシートに書かせると、自分の考えが書けていない子がたくさんいることが分かった。2年生なので、気づいたこと、見つけたことを文にすることが身に付いていると想定していたが、そうではなかった。

そこで、以前1年生を担任していたときに使っていた「4行作文」の

用紙を使って文章を書く練習を取り入れた。始めは、主語がなかったり、箇条書きのメモのようになっていたりしていた子もいたが、全体への指導を繰り返して4行作文が書けるようになった。5月から4行作文を週末の宿題にして、文章を書き慣れるようにしようと考えた。

月 日 曜日			
しゃしんやきりめきをはったり、えをかいたりしましょう。			
④	③	②	①
さいごに、じぶんのきもちを かきましょよう。	くわしくします。	なにをしたのかなど、つたえたいことを かきます。	なにについて、かくのかを かきましょよう。

光村図書の2年1学期の国語科は、作文の単元が多い。5月下旬に「かんさつ名人になろう」、6月下旬に「こんなものを見つけたよ」がある。「かんさつ名人になろう」では、「おにかいたさ」を視点として示した。か…形 い…色

お…大きさ た…たとえ
に…におい さ…さわった感じ
か…数

これらの視点についてメモをしたことをもとに、観察文を2回書いた。「こんなものを見つけたよ」では、町探検や校庭で見つけたものについての作文を書いた。

校内にあるビオトープと生活科園のような「緑の教室」を見に行き、メモを書いた。次に、始め・中・終わりの構成になるように組み立てをノートに書き、それを基に作文を一斉指導で書いた。2回目は町探検で見学した地域の交流センターについて、3回目は町探検で見学した学校の近くの駄菓子店について組み立て

を書き、作文を書いた。4回目は、ビオトープの近くにあるねむの木の花が咲いていたので、木や花、葉を観察してから作文を書いた。

さらに挑戦できる子は、生活科「生き物と仲良し」で飼育したダンゴムシや青虫などの生き物についての作文を書いた。

このように、始めは少ない量から指導を始めて文の形を確認した。また、どう書いてよいか分からない子が多いので、一斉指導で組み立ての書き方をノートに書かせ、それを基にすれば作文が書けるようにした。1度や2度やれば書けるようになるはずがないので、子どもが経験したことや見たことを材料にして、繰り返し作文に取り組んだ。もちろん、個人差が大きいので、書ける子には長い文章を書いてもらい、苦手な子は始め・中・終わりの構成で書けることを目指した。苦手な子が作文嫌いにならないように、書けなかったときも無理に書かせることをせずに、

何度も書く機会を作る中で身に付くようにした。

週末に取り組んでいた4行作文は、6月からは10行作文にして、2年生として書いてほしい分量の用紙に変更した。

1学期の最後の週末の宿題に10行作文を出したら、

「先週は作文の宿題なかったから、作文の宿題うれい。何を書こう。」と言った子がいて、書くことが楽しくなってきた子が増えていることを実感できた。

この1学期間で、書くことが苦手な子が多いと、授業の課題を変えざるを得ないことを実感した。

そもそも、50音表がすらすら書けないと、板書をノートに書くことにとても時間がかかる。さらに、自分の考えを文章で表せなければ、始めの感想や終わりの感想が書けない。文学教材の予習などにも当然取り組めない。

国語だけでなく道徳でも自分の考

えをノートに書くことができなかったら、考えをまとめることもふりかえることもできない。

自分の考えを表現するのに書くことがこんなに大切だと再確認できた。

1学期末にも、ひらがな・かたかな50音表、MIMアセスメント、2年新出漢字、1年リズム漢字をまとめとして行った。あせらずにこつこつと計画的にレベルアップを図っていこうと考えた1学期だったが、十分にレベルアップできたかという、まだまだ不十分だと感じている。

子どもたちの様子から、視写の必要性を感じて、夏休みの宿題に視写プリント10枚を追加した。文章を書き写すことで、集中力とともに日本語の正しい表記や原稿用紙の使い方にも習熟してほしいと考えている。

2学期は、前任校の2年生で取り組んだ「はがき新聞」にも取り組み、作文の力を伸ばすとともに、自分の考えを書ける子を育てたい。

ノート指導 視写することと学力をのばしていく

兵庫県公立小学校 教諭 十川 康彦

はじめに

今まで学力研で何の実践発表もしていないわたくしが、なぜ「ノート指導について」という題で原稿依頼されたのか分かりません。日頃の取組のほとんどは、久保先生をはじめ学力研の先生から学んだことばかりです。目新しいことは何もないのではと思いつながら、国語の授業の様子を再現して見たいと思います。国語の授業は、我流ですが芦田教式を使わせていただいています。

国語の授業流れ

一時間のどの場面でノート指導をしているのか、国語の授業流れを紹介します。

- ① 全文音読（席順読み）
- ② 前時のふりかえり
- ③ 簡単な質問をして席順に答えさせる。
- ④ 本時の場面の教師による範読
- ⑤ 子どもの音読
- ⑥ 斉読か席順かはその時々で変わる
- ⑦ 視写

その日学ぶ場面の本文から考えさせたい文章をこちらが選びその文章を視写します。

教師は、子どもと同じノートにあらかじめ書かせる文章を書いておき、ノートと板書が一致するように準備しておきます。

- ⑧ 音読（板書を読む）
- ⑨ 解く
- ⑩ 視写したところを中心発問にして話し合う。

- ⑪ 振り返り

- ⑫ 本時の場面の音読

視写することの価値

以上が、1時間の流れです。時間の関係で③と④、⑨を省略することもあります。⑤を省略することはありません。なぜかと言うと国語の授業においては、本文を視写することがどの子も取り組める書く力を伸ばす教育活動であると考えます。ただ教科書の文章を写すだけです、書くことで音読だけでは気が付かなかったことに

気づくことがあるのです。視写することは、「手で読むこと」だと思っています。書く

ことで、内容を把握し、自分が別の文章を考えて書く時の力になります。視写なんて子どもは喜んで取り組むのだろうか、と思われる方もいるかもしれません。書くことに慣れていない子は、最初は面倒くさがります。しかし、慣れてくるにしたがつて書くことが当たり前になり、みんなと同じようにノートに文字を書くことが心地よくなってきます。教師も特別な準備は要りません。簡単で、誰にでもできて、学力を伸ばす取り組みです。では、具体的に紹介していきます。

指導の実際

T ノートに下じきを敷いて、鉛筆を持ちます。日付を書きます。出来た人は手を挙げます。（机間巡視）
お隣さんも手を挙げていたら手を下ろします。

T 教科書の○ページの○行目からの文章を書きます。最初なので一マスあけて○と書きます。（○は、その文章の最初の文字）○しか書きませんよ。（机間巡

視をしながら「できてるね」「落ち着いて書いてね」「丁寧に書いているね」「書くところぼつちり合ってるよ」など声を掛けていきます。

なぜ、はじめに一文字だけ書かせて机間巡視をするかと言えば、この時点についてこられていない子、書くところを間違う子がいるからです。段落の意識を持たせるために最初必ず一文字書かせてチェックをいれます。ここで間違えても直しさせるのはそんなに苦にはなりません。

T 続けて書きます。(読点が出てきたら) はい、ここで点を打ちます。点を書いたら、隣の人がしているかお互いに見てあげてください。

T (行の終わり近くになると) あと、何マス残ってますか。

(ここで文字飛ばしや、句読点忘れを確認する)

T (終わりのマスの処理)

ここでは、最後のマスに文字と読点を同じマスに書いてください。(とか)最後のマスは「。」もしくは「。」になります。(などと声を掛けます)

T (時々チェック)

はい。ここで○を書きましたね。となりの行の□の横のマスに書いていますか。

このように、みんなが教師と同じスピードで書くようにその時々チェックを入れたつ書き進めていきます。

早くかけた人は

早くかけた人には、書いたノートをみんなの前で読ませていきます。教科書や板書でなく、自分が書いたノートを読ませていくのです。正確に丁寧に書いた子は、スラと読めるはずです。音読する中で、自分の書き間違いに気づいて直す子も出てきます。その間に、書けていない子の様子を見たりアドバイスをしたりし全員が書き終わるのを待ちます

時間をかける覚悟

年度初めの授業は、とても時間がかかります。なので、先ほど書いた一時間の流れを全てすることはできません。早く書くことより丁寧に書くことを意識させます。そんな時は、文字が上手に書けなくても教師の言うことをしっかり聞いて丁寧に書いて

いる子を見つけては、低学年ならみんなに聞こえるように、わざと大きな声で褒め、高学年なら小声で本人にだけ聞こえるように褒めるなどクラスの雰囲気に合わせて声を掛けます。

自分のノートを見て成長を感じる

ICT教育で、子どもがタブレット端末を使う機会が増えてきました。その分ノートに書く機会が少なくなり、書く力が伸ばされていないようです。

国語に限らず他の教科でも視写のようなことに取り組みます。例えば、3年生の理科で『植物のつくり』を学習するときには、根・くき・葉をノートに先生と同じスピードで書かせます。『こん虫の体のつくり』では、頭・むね・はらをかき、次に六本の足がむねから生えていること確認しながら書いていきます。図をかくことによって理解が深まっています。

このように視写する授業を積み重ねていき、一冊のノートが終わった時、どの子ども自分の書いたノートを見て、「自分ってよくがんばったな」と成長を実感していきます。

書くためのスタートアップ

加藤 英介

はじめに

「書くことが好きな人はいますか。正直に言うと、苦手な人はいますか」と聞くと半分以上が苦手な子がいる。その理由は「書き方がわからない、何度も書き直しがある、面倒くさい」がほとんどであった。「みなさんは今までの学習で、たくさん書いてきましたね。少なくとも学校の中ではトップを争うレベルだと思います。そこで質問です。ある時、1年生に『ノートに書くかどうかといういいことがあるの?』と聞かれたらどうやって答えますか」と問いかけた。「賢くなれる、頭が良くなる、後でも見返すことができる」と意見が多くでてきた。「書くことのプロだったらどのように答えると思いますか」とさらに聞く。「昔々、人は自分の気持ちを伝えるために言葉を作りました。しかし問題もありました。それはその場ではわかっても違う人に伝えたり、遠くの人に伝えることができないことです。そこか

ら文字が誕生したと言われています。書くことによっていつの時間を超えて知ることができるようになったのです。いつでもどこでもその人の考え、その時に伝えたい思いが文字から理解することができのです。あなたは誰に何を伝えるためにノートを書きたいですか。自分が決めた目標や学級目標の中の一つにも書くことが含まれていません。最初から書ける人はいません。だからいろんな書き方を手に入れながら進めていきましょう」学級開きや授業開きの際に伝え、書くことへの意欲を高める。

授業開き 算数ノート基礎編

授業開きの時には、書き方を伝える。

- ①日付・曜日を書く
- ②教科書のページ数を書く
- ③二行目から本時のめあてを書く
- ④教科書の問題文もしくは自分の考え
- ⑤友達の考え・全体の話し合い

⑥振り返り

最初の1時間は、黒板を使って子どもを書く速さに合わせながら、ゆっくり丁寧に書くことを心がける。特に、行を変えるところや赤枠で囲うところはペアやグループで確認させながら全員が書けるようにする。この時に気をつけることは、小さなチェックを多くすることである。

- ①②ができたら姿勢を直す
 - ③ができたら立つ
 - ④ができたら、持つてくる
 - ⑤ができたら友達の名前と意見を書く
 - ⑥ができたら提出する
- こうすることにより、一人一人の状況を把握するとともに「字に気持ちが入っている、丁寧になった、枠を意識しているね、見やすくて助かる」などの励ましの声をかけることもできる。このように取り組むことで、ノートを書くことへの抵抗感を減らすことができる。しかしながら落とし穴もある。それが最後の振り返りである。よくあるパターンとして「楽しかった。わかった。」などその時の感情のみを書いて終わってしまう子である。

こうならないために、事前に教師が振り返りを示す。

C 今日の小数について勉強しました。

B 今日是小数の仕組みについて学びました。10倍・すると位も上がることがわかりました。

A 今日は小数の仕組みについて学びました。10倍・すると位が上がったり、10で割ると下がったりすることを知りました。計算はどのようにするのだろうと疑問に思ったので、明日調べたいと思いました。
ABCのどれをめざしたいか自分で決めることにより、小さな見通しを持たせてから書かせる。

算数ノート応用編

教科書に即して、ノートが書けるようになってきたら、レベルを上げる。例えば、教科書の課題だけでなく自分の課題を書かせる。自分の考えが式と答えのみで終わっている場合は、図や吹き出し、イラストを用いて相手に理解してもらったことを考えて書き込む。全体の話し合い

の時に聞いたことをただ書くのではなく、新しく発見したことや気付いたこと、疑問に思ったことを書き留めておく。振り返りでは、45分の流れがわかるように物語のように書かせてもよい。

練習問題の際には、ただ問題を解かせるだけではもったいない。すぐに問題を解き終える子には「ちよつと相談事があるんだけど、いいかな。実は問題を解ける人はいても、問題の解き方を説明してくれたり、解説書を作ってくれる人がいなくても困っているんだ。完璧に問題を理解している〇〇さんにぜひお願いしたいと思うんだけど、どうかかな？もし、これができたとしたら、〇〇さんのおかげでクラスの点数が大幅アップの可能性もあるよね！」と伝え、意欲を高める。また、類似問題を作ってもよい。授業の終盤には、作成した問題と先生問題をみんなで解くことにより、点数アップを図る。このとき、先生問題はテスト対策を踏まえての問題にしておく。授業中に何気なく解いた問題がテストに出ることにより、次の学習意欲にもつながる。

おわりに

「書くことの目的はなんだろう」「誰に何を伝えたいから書くのだろう」という相手意識をさせることにより、書くことの必要性を実感させることができる。また「書かせる」から「書きたい」という気持ちにするためには教師の言葉がけが必要不可欠である。その子の現状と目標を見極めながら少しだけ背伸びできる課題を出すことによつて少しずつ書けるようになってくる。地道にコツコツと積み上げて行くことを念頭に置いてこれからも目の前の子どもたちに書く力をつけさせていきたい。

今回の内容については、8月の全国集会分科会6年生の方で詳しく話をする予定です。算数のノート指導、書くためのスキル、算数ネタ（トランプ・ジャマイカ）など時間のあるかぎり伝えていきたいと考えています。ぜひご参加ください。

書くことの意味と意図を考えながら指導する重要性

福島 尚（神奈川県）

GIGAスクール構想により、タブレットを使った学習があつという間に広がり、段々と【書くこと⇨入力】というような形の授業が多く見られるようになってきたように感じます。皆さんの学校でも同じように学習の中でタブレットを使用する頻度は高くなっているのではないのでしょうか。

そのような現状の中、一度立ち止まり、【書く】とは、どういうことなのか、何のために書くのか、ということを考えてみたいと思います。

【書く】といわれて、どの先生方もまずノートが頭に浮かんだのではないのでしょうか。ただ、ノートに書くといつても『板書を写す（書く）』『自分の考えを書く』『感想を書く』『振り返りを書く』・・・などなど、内容がそれぞれ違うと思いますし、指導も異なります。ということは、ただ単に書かせるだけでは何も力がつかないということ

です。つまり、様々な指導をするからこそ書く力が付く↓語彙力も高まる↓思考力も身に付く。実は書くことを通してたくさん力が身に付き、子ども自身がパワーアップ！するという良さがあります。では、毎時間振り返りを書かせたり、毎日日記を書かせたりと、とにかく書かせればよいかというところでもないと思います。例えば一年生であれば、ひらがなが書けるようになってきたときに連絡帳を使って書く機会を増やしていきます。

6がつ11にち かようび

Ⓜ・・・Ⓟ
すきないろは、あかです。

右のように、初めはかんたんなものを書かせるようにしていきます。一年生は、ひらがなが書けるようになって嬉しくなってい

るので、このような取り組みをすることで書くことに対する楽しさでいっぱいになり、さらに長い文を書きたい気持ちにもなっていきます。そして、どのようなことを友達が書いたかが気になるので、友達と話をするきっかけにもなります。書くことに慣れるまでは一週間「すきな○○」シリーズで書かせるようにすると、苦手な子も見通しを持って書けるようになっていきます。ある程度慣れてきたところで、理由を書かせることをしていきます。

7がつ15にち かようび

Ⓜ・・・Ⓟ
すきないろは、あかです。どうしてかというところ、とまどのいろいろだからです。

すると、子どもたちは思考し始めます。一年生であっても、たくさんのことを考え、その中から選択し、文を書いていきます。教師が意図を持って書かせることにより、書く力がどんどん伸びていきます。

中・高学年では、まず振り返りを通して書く力を伸ばしていきます。根本的なことですが、学年の初めに振り返りは『感想』

「書く」「聞く」でつながる活動

兵庫 十川 瑠都

私が今、勤務している学校では、授業でワークシートを使うことが多い。大体の場合は、子どもたちの分かりやすさや教師の説明のしやすさを理由にしている。確かに、マスや罫線以外には、何も書いていないノートに、黒板を写すことや、自分の考えを書いていくことは、簡単なことではない。

また、学校で行われる研究授業で、ノート指導について、議論されることはあまりない。ノートに書く力は、それぞれの子が元々もつ力と考えられており、どう指導していけばよいのかを検討する機会は少ないと感じている。そして、子どもたちに負荷がかかることは、避けられがちである。「分かりやすさ」が重視されれば、どの子ども同様に授業に取り組めるのかもしれない。しかし、「分かりにくいこと」や「難しいこと」に挑戦することこそ、脳を鍛え、達成

感を得ることができ、長い目で見れば、自ら学ぶ子を育てることになるのではないかと思う。

初任の頃から、学力研で学んできた私は、ノート指導に力を入れている先生たちの話を聞いてきた。講座で、子どもたちのノートを見せてもらうこともあったので、ノートに考えを書くことを楽しむ子どもたち、自分の成長を感じる子どもたちといった理想をもっている。その理想に向かうために、実践していることを五つにまとめた。

① 見通しをもてるノート指導

同じ内容を学習したり、同じ発問をしたりといった授業はないが、ある程度は、流れが分かる授業を目指している。これは、子どもたちの安心感につながるかと考えているからである。それ

と同じ理由で、ノートは型を決めている。国語であれば、日付や題名を書くこと。算数であれば、日付やページ数・めあてを書くスペース等。いつもお決まりの流れなので、「先生、もう書いたで。」と教えてくれるようになっていく。ノートを書くことは難しくなく、自分から書くことができたという自信につながる。

② 黒板を写す

算数であっても、国語であっても、黒板をそっくりそのまま写せるかということを目標にしている。どの子にとっても分かりやすいゴールであり、自分で達成の度合いを確認することもできる。今年担任している小一は、一番初めのノート指導では、三十三人のうち、そっくり書けたのは、五人であった。ノートのマス目に合った小黒板に見本を書きながら進めたが、思ったよりも書けなかったというのが印象である。ただ、繰り返し続けていくと徐々に書ける子が増えてきているので、一

度では、成果や成長は分からないなど感じた。

③ オリジナルノートづくりを楽しむ

ノートを書くことに慣れてきたら、自分なりの工夫を書いてよいということにしている。子どもたちは、素敵だと思つた友だちの発言をメモしていたり、オリジナルキャラをつくって、ポイントを吹き出しにまとめたりしている。そんな様子を見るとノートを書くことを楽しんでるのだなと感じる。ノートまとめに一生懸命になるあまりに、授業での発言よりもノートの美しさにこだわってしまうことが課題である。

④ ノート交流をする

やる気をもって取り組んだものは、教室みんなで共有したい。だから、ノートを回し読みしたり、そのまま教室の後ろにノートを開いてマグネットで貼り付けて見れるようにしたり、コピーを取って掲示したりとあらゆる方法

で自分のノートを見てもらう機会や、友だちのノートから刺激をもらう機会をつくるようにしている。

⑤ 学級通信で伝える

④のノートの交流にも似ているが、学級通信でノートの画像を載せることも少なくない。そのときは、どんなところが素敵だと思つたのかをセットで書いている。単純にビジュアルが美しいノートについて、紹介することもあれば、国語の感想を書いたノートの一部を紹介することもある。学級通信にのせてもらったという自信にもつながるし、自分の書いたノートは誰かに見てもらえるのだと子どもたちが思うだけでなく、意欲につながっていると感じる。

自分の実践をふり返ってみると、子どもたちの自由な思いを綴るといふ活動が少なかったなと思つた。国語の物語文についての感想、授業の振り返りなども自分の考えを表現する活動であるが、もっと自由に思

いを書く時間もとっていきたくないと考えている。

最近、チャットGPTを用いて、文章を作成させることが当たり前になってきている。SNSでは、チャットGPTに資料づくりをってもらうことを進める投稿もよく見かける。自分の頭をつかって、自分を表現することが評価されるのではなく、AIをつかうことこそ、要領の良さであり、賢さのように語られている。試しに、チャットGPTに読書感想文を書いてもらった。とても整つた文章を書いてくれた。いくつかの質問に答えただけなので、かかった時間は五分くらいで、とても楽しかった。でも、書くことが楽しいとは感じなかった。

「書かなくていい」「考えなくていい」「調べなくていい」たくさんさんのことは、これから省くことができるようになる。だからこそ、子どもたちが、「書くことは楽しい」「考えることは楽しい」「調べることに意味がある」と一つひとつ感じられる実践を考えてきたい。

子どもたちが納得感をもって取り組めるノート指導

広島 古東 秀一

ノート指導の意義

現在、小学校においても一人一台端末の活用が進み、タブレットを用いて自分の考えをまとめたり、調べたことを整理したりする学習が増えてきている。アプリの種類も豊富になり、成果物を効率的に全体で共有できるようにもなっている。

一方で、「ノートに書く」「紙に書く」という行為が非効率とされる場面も見られるようになってきた。私は、こうした時代の流れだからこそ、ノート指導の重要性を改めて強く感じている。

東京大学の酒井教授は、自身の著書「脳を創る読書」の中で、「手書き文字は、活字より情報量が多い」ことを述べている。「手書きの方が活字よりも、「出力の情報量」が多くなる（一部省略）」とも述べている。この、情報量の多さ、例えば、紙と文字の位置関係などの手がかりが多くなる分、脳に深く入

りやすくなり、デジタル機器で入力したよりも記憶に残りやすいというのである。

つまり、記憶を定着させたり、創造的な発想を広げたりするには、手書きという行為が非常に有効であるということである。デジタル機器が当たり前となった今だからこそ、ノート指導の価値はむしろ高まっているのである。

私は今年で教員3年目になる。指導経験はまだ浅く、豊富なノウハウがあるわけではない。ノート指導の大切さを痛感したのも、2年目に入ってからであった。

それまでは、授業を成立させることに精一杯で、ノートまで十分に目を配ることができていなかった。今回は、限られた経験の中で私が取り組んできた実践や工夫、そして子どもたちの変化について紹介する。

ノート指導の実践

ノート指導において重要なのは、4月

5月の取り組みである。この時期に、とにかく丁寧に見て、フィードバックすることが、その後の子どもたちの姿勢を大きく左右する。

私はすべての教科を見るのではなく、国語・算数・社会・道徳の4教科を中心に、重点的に見ている。負担を感じすぎず、継続的に指導を行うための工夫である。

丁寧に見ていく中で、次の2点を学級全体に伝えている。

①ノートに書くことの良さ。

②先生がノートを見る時の視点。

ノートに書くことの良さについては、先述した酒井教授の話や東北大の榊氏が示している脳の活動量の図や写真などを示しながら伝えている。こうして伝えることにより、子どもたちも納得してノートに取り組むようになる。また、ノートに書きなさいということではなく、「脳を鍛えよう」という合言葉も生まれ、前向きに取り組む様子も見られるようになる。

この話は、他の場面でも適用することができる。例えば、計算活動や音読活動である。この場合においても、脳の活動量が大きく

変わるため、同様の合言葉で取り組むことができる。「しなさい」よりも「脳を鍛えよう」の方が子どもたちは、意欲的に取り組むようになるのだ。

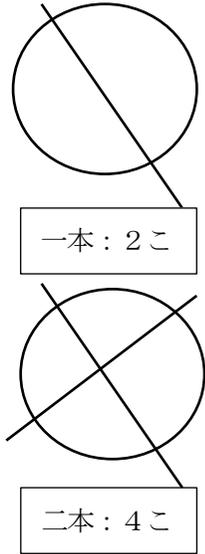
二つ目の「ノートを見る時の視点」である。これを明確にすることにより、子どもたちは、何を頑張れば良いのかが明確になり、より取り組みやすくなる。

これから紹介するのは、今年、学年の先生に教えてもらい、取り組んだ実践である。

教科は算数である。課題は、

「円に決められた数の直線をひくとき、最大でいくつに分けることができるか」である。

(図一)



右の図一のように、円に直線を引つ張り、円がいくつに分けられるか考える。そして、六本の時、七本の時、そして、十一本の時はどうかと子どもたちに考えさせる。

その際、子どもたちには、「ノートに自分で書いた円や線は消さないで下さいね。正しい答えを書く時は、これまで考えたものとは別に新たに書き加えてね。」と指示をする。こうすることで、子どもたちはいくつもの円を描いたり、何度も直線を引いたりして、試行錯誤を繰り返しながら答えを導いていく。

この活動を通して、子どもたちは、
・たくさん自分の考えを書くことで、答えを見出すことができたこと。

・答えを見出す時には、前に書いた自分の考えが有効になること。

・間違った考えも答えを見出すための大切な手がかりになること。

・表や図に表すことで整理されること。

を実感する。活動の最後に、私はこう伝える。「ノートを見る時には、正しいか間違っているかということよりも、学習の中で自分なりに工夫したり考えたりすることができたかを大切にします。だから、ノートに書いた考えが間違っても、消さないでくださいね。」この言葉で、子どもたちは安心して自分の考えを書くことができる。

他にも、図を使ったり、工夫して書いたり

しているノートをクラス全体で共有することも大切である。

こうした日々の取り組みを通じて、子どもたちは「書かされる」から「書きたい」、「ノートにまとめることは大切なんだ」という意識へと変化していく。

ノート指導の延長上の成果

今年度の一学期の最後、お楽しみ係主催のお楽しみ会を行なった。スライドやキャッチボールを使い説明を行っていた。

一方でその裏には、ノートの存在があった。ある児童は、ノートに一連のシナリオ(活動の流れ・セリフ等)をびっしりと書いていた。そのシナリオをもとに、スライドを作成していたのだ。

つまり、「創造したり発想したりする場面ではノート」「伝える場面ではスライド」というように、ノートとデジタルをうまく使い分けていたのである。これからの時代に求められる力が、こうした姿から垣間見えたと感じた。二学期、三学期も引き続き、ノート指導に取り組んでいきたい。

「意欲格差」に負けない！公立小学校へ

事務局長 岡本 美穂

板書についての本をまた書いています。少し紹介します。

「ていねいな美文字板書」(仮)

板書についての本は、本書で二冊目になります。

一冊目を書いてから十年が経ちました。板書について学ぶ機会には、相変わらずありません。

そのついで、十年前よりも、学校現場は複雑になっています。

毎日いろいろなできごとがあり、気づいたら五時が過ぎようとしている中で、板書にこだわるのは難しいかもしれません。

しかし、板書の悩みは消えませぬ。

同僚の板書の上手な先生になればなるほど「達人技」。まねができない領域となり、言語化することが難しくなっています。

一方で、板書の苦手な先生方はICTに頼りてしまっています。または、貼り物や短冊に

頼りかたなのです。

そして「研究授業」の時だけ、急に凝った板書となり、違和感を感じてしまい、続かなくなってしまうのです。

本書は、今まで私が実践してきたこと、研究してきたこと、教えていただいたことを参考に、教科書的な、正しい、かしこまった板書ではなく、

参観で保護者が見ても、

「先生の板書の文字は、きれいだ。」

「わかりやすい授業をしてくれているな。」

とよいように板書を通して感じてもらうためのよみかた、

「ていねいな美文字板書」

を「しゅべつ」に、私なりの実践とお手本な

どを紹介しています。

ただし、この本は、板書がうまく書けない、と板書に悩む先生方向けに、書きやすさや、文字のバランスの良さを優先して書いてるので、教科書通り、お手本通りの厳密な「はね、払い」などは多少違っていてもいいがあります。ご了承ください。

これを機に、板書が好きになり、先生方が自信を持って目の前の子どもたちと楽しい授業をされることを心から願っています。

「板書は必要ない。」

この言葉を耳にする機会が増えました。

板書は、教師が行うものであって、子どもが思考する機会を奪っているとも聞いたことがあります。

本当でしょうか。

一つの花を学習中のことです。私が板書について

「先生、その言葉はそこに書くよりも向こうの方がいいと思います。なぜなら……」

と説明してくれたことがありました。

また、私は板書しながら、悩んだ時は子どもたちに聞きます。

「どうして書いたらいいな？」

「なんて書いたらいいかな？」

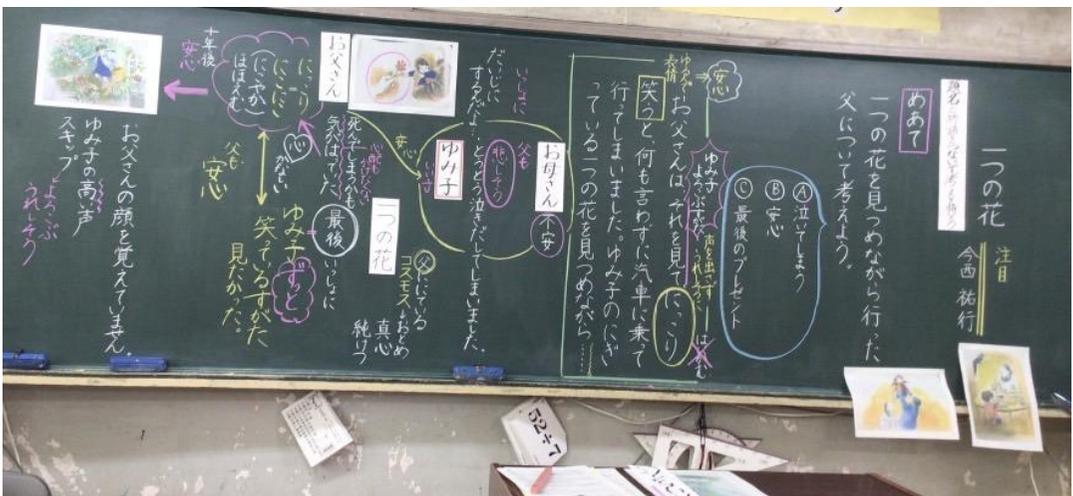
「このような機会を、意図的に持っているので、板書は教師のもの、という感覚は全くありません。

私はふつつの小学校の教師です。

大阪の公立小学校で、同僚の先生方に助けてもらいながら、毎日、目の前の子どもたちみんなが、

「できたわかったつながった」

と喜び合える授業をめざして、日々実践しています。



だからこそ、

黒板は書かずに、タブレットですすめるべきでは？

板書は必要ない？

ICTの活用でカバーをすればなんとかなる？

こんな議論は意味ありません。

なぜなら、当たり前前に学校にある「チョーク」と「黒板」で、子どもたちと楽しい授業ができることを知っているからです。(もうろんICTはびびり活用していきます)。

私が日々感じていることですが、子どもたちとともに授業を行い、たとえうまくいかなかったとしても、心をこめて書いた板書には、力があります。

この本をきっかけに、みなさんが少しでも目の前の子どもたちと素敵な板書をつくりつづけることを願っています。

語彙を増やすための授業の組み立て方②

自分の脳の中に、どれだけの語彙があるかは、何も見ない状態で、紙に書き出してみるといいだろう。

語彙の量が、考える力の土台なのだから。

教材文との出会い

『こくご二上たんぽぽ』（令和六年度版、光村図書）の「きせつのは夏」に、谷川俊太郎の詩「みんな」が載っていた。

みんな

たにかわ しゅんたろう

みんな なくのは せみ
そうっと ちかづく あみ
はやしの むこうに うみ
きらきら かがやく なみ
よびごえ きこえる みみ

いちばん なかよし きみ
とこやに いったね かみ
まっかに みのった ぐみ

四行二連の詩で、四音・四音・二音のくり返して構成されている。

せみ・あみ・うみ・なみ・みみ・きみ・かみ・ぐみ、というように、二音は「□み」の言葉となっている。

この詩は、いきなり全文提示するのではなく、小出しにして、どんな言葉が入るか考えさせたい。そんな詩である。

授業プラン・みんな（理科編）

- ① 「□ん□ん」のみ提示して、どんな言葉があるか書かせて発表させる。
- ② 板書された言葉を分類したり、理科に関係するのはどれかを考えさせたりする。
- ③ 「□んみん」で、どんな言葉があるか書かせて発表させる。

④ 詩のタイトル「みんな」を紹介し、何のことか考えさせて発表させる。

⑤ 谷川俊太郎の詩であることを教え、一連一行目の「みんな なくのは」何かを予想させて、ノートに書かせて発表。（多分正解の「せみ」が出るだろう。）

⑥ 「セミはなぜ鳴くのですか。」

⑦ 「どのセミもミンミンと鳴くのですか。」

⑧ 「セミによつて泣き声がちがうのはなぜか。」

⑨ ⑥～⑧の問いを最初は日付から始めた出席番号で言わせ、後は挙手で言わせる。

⑩ 一連二行目「そうっと ちかづく」の何かをノートに予想で書かせ発表。

⑪ 「虫取り網が網なのはなぜか。」（上記の正解は「あみ」。）

⑫ 一連三行目「はやしの むこうに」あるもの、一連四行目「きらきら かがやく」ものをこれまでのようにノートに予想を書かせてから発表。

⑬ 「海で波ができるのはなぜか。」（三行目「うみ」、四行目「なみ」）

⑭ 「二連を書きましょう。」と言ってから、「一連目にはどんなきまりで作られているか分かれば二連も作れそうですね。」と言っ

て、一連目のきまりを発表させていく。

⑮【板書】□み

「みで終わる二文字の言葉を書けるだけ書いてみましょう。」

⑯「ぐみとは、何でしょうか。」 板書が出そろった所で、発表。

みんな（理科編）・実際の授業①

六年生に「みんな・理科編」の授業をした。

【板書】□ん□ん

一人当てると、「りんりん」が出た。

「何のことですか。」

・鈴の音です。

三分間で何個書けるかをやった後、班の中で一番少ない子から交代で板書させていった。

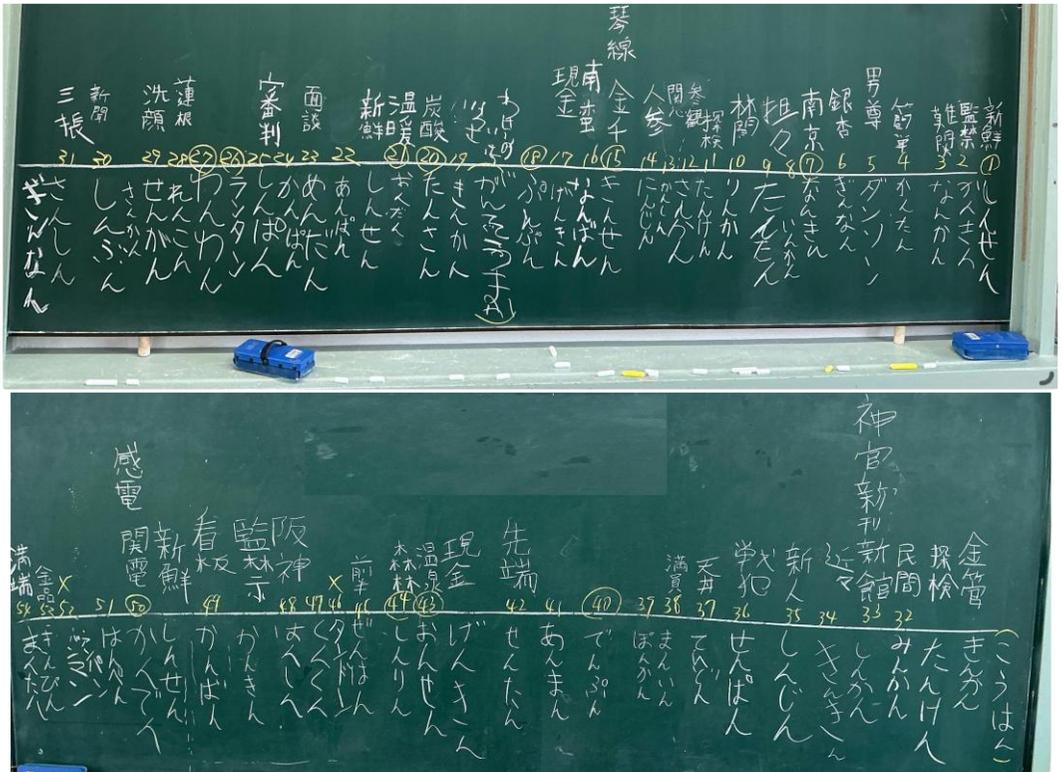
最初、黒板の下の方に横線を引き、その線の下に、縦書きで書かせていった。途中で、

「漢字に直せたら、線の上に漢字を書きましよう。」

と指示した（これは授業中の思い付き）。

途中、

「ほかの人のものでも、漢字に直せる人は



漢字に直しましよう。」と追加指示した。

そのあとに発表させ、その後に分からない言葉を質問をさせていった。

ただ、漢字で書いてあると、何のことがよく分かるようだ。

授業の導入、これだけで、語彙を増やす学習になっている。

みんな（理科編）・実際の授業②

詩「みんな」の一連を紹介した頃には、各行の最後は二文字の言葉で、「すみ」となることに、ほとんどの子が気付いていた。

そこで、「すみ」の言葉も三分間で書けるだけノートに書かせて、前と同じように班で少ない子から交代で板書させた。

「じっくりと見る、観察する、デッサンする、
メキを取る、書く、描く」という学習が軽視されている現場

伊丹学力研 前田昌彦

久しぶりの投稿です。細々と例会を月一回ないし二か月に一回行っています。いつも金曜日の午後七時から十時すぎまで全員が揃うまでおこなっています。週末で結構たくさんの方も多し中、元伊丹で働いていた方(川西、宝塚西宮、豊中)、現在伊丹に勤務している方も構成しています。

図工をどうするの

今年是一年三人、二年二人、四年一人、六年一人、日本語学校の教諭という構成でバラエティーに富んでいます。今回は私が教師生活初めての図工専科となりましたのでどのような教材でどのように指導しているのか、全員が楽しく達成感のある授業にするにはどうするのかというテーマを進めてもらっています。もちろん、各メンバーで報告してもらっています。

一年は何といってもクレパス

まずは鉛筆で下書きをすることを多くしているの正しい鉛筆の持ち方指導をしました。次にクレパスも鉛筆持ちとチョーク持ちの二種類を教えます。混色や広い範囲をぬるときはチョーク持ちをするからです。肌色を作るときに赤や黄色、茶色などを重ね最後に白色を使うと「わー肌色や」と子供たちから驚きの声がおきました。

きれいなアジサイの花と葉

アジサイの表現方法は折り紙、切り貼り、クレパスのこすりだし、とありましたがサークルで相談した結果一番誰でも成功しやすいクレパスでのこすり出しにしました。一人ではなかなかアイデアが出てこないのですが、楽しいですね。



黒板にみんなの作品を貼り出すと「わあきれい。アジサイの花畑やあ」という声が上がりました。もちろん私も作品の見本を作ったので、作ってみたいとなったそうです。方法は花びら部分は画用紙に三センチ角の穴を開けた画用紙をつくり、その周りに好きな赤系か青系のクレパスをぬり、白の八つ切りの画用紙に乗せて真ん中に向かってこすりだします。いくつも重ねて花を作っていくと本

物のようになります。子供たちも夢中になっていました。

葉っぱは緑の画用紙をハサミで切り、葉脈は黄緑のクレパスで線を引く。それを白画用紙に糊付けして切り取った花びらも貼り付けました。

プールの水を表現すると

二年は水泳の様子を写真で撮ってきてみんなに水の様子を見せました。絵具で青や水色で塗るだけでは表せないことがわかります。水の中の模様を白いクレパスで描いていくことにしました。あとは自分の体を鉛筆で下書きをしてからクレパスで色を塗った画用紙を糊付けしました。



静物画のデッサン

四年は、どの学年の教科書もそうなんです。が、どんな力をつけるのか作品を見てもよくわからない、全員が達成感を得られて楽しく授業ができるものが見当たらないと感じます。

テレビの番組で「プレバト」というのがあります。が、正確なデッサンの色塗りに感動します。何とか子どもたちにもそれに挑戦させたくて私の畑で取れた玉ねぎ(十一月に苗を植えてから八か月育てた晩成種)を教室に持ち込んで二人に一つ見て触って鉛筆でデッサンしてもらいました。完成は色を塗る二学期なので好きな色の細いマジックで描いています。感想を書いてもらうと「最初はむずかしいなと思ったが描いていくうちに楽しくなってきた。」という子どもたちがほとんどでした。やはり本物にまさるものはありません。もちろん個人差は出ますが、そこは個人指導で補います。



これは私のお恥ずかしい見本です。二学期にどんな各品ができるか楽しみます。この一年はまずは私自身が楽しんで作品の見本を作る中で子どもたちにもどのようにアプローチするかを考えて仕事に励みます。

新井 紀子著 『シン読解力』

学力と人生を決めるもうひとつの読み方 (東洋経済新報社) の紹介

金井 敬之

シン読解力と3つの指摘

シン読解力とは、教科書や新聞などで使われる「知識や情報を伝達する目的で書かれた自己完結的な文書」を読み解く力のことであり、文学作品などを読み取る力(従来の読解力)と著者は区別している。

シン読解力は、自学自習する上で欠かせないスキルであり、シン読解力が低いと学校の学習だけでなくビジネスにも支障をきたすという。

このシン読解力について、著者自身の学生時代の経験と自らが開発した「リーディングスキルテスト(RST)」の結果から以下の3つのことを指摘している。

①各教科の教科書を読み解けるような読解力を身につけるには、読書では不十分であり、自己流の読みが、一部の教科の読解を阻害することさえあること

②教科書の書かれ方には、ある種の「型」があり、その「型」を意識させるほうが自由に通読させるより教育効果が高く、型を身につけるには、トレーニング以外にはないこと

③18歳以上で、しかもその教科が大嫌いで、トレーニングの内容が適切で、学習者にトレーニングを継続する能力と意欲さえあれば、人生で困らない程度にはその教科の読み書きを身につけることができること

小学校でコミュニケーション力もあり勉強もできたのに、中学校や高校で成績が振るわなくなってしまう子は、「シン読解力」で説明がつくかもしれないと著者はいう(何割かの教員は自分も含めてこのケースに当てはまるのではないか。自分は高校で見事に落ちこぼれた)。

チャットGPTとシン読解力

チャットGPTは、人間のように流暢に話したり、書いたりすることを目的に設計されたもので、正確な情報を提供するために開発されたものではない。したがって、まちがいが発生する。平気であそをつく。

それを見抜いてチャットGPTで書かれた文章を読み取り、正しい文章に修正するのが人間の仕事である。AIを使いこなすには、シン読解力が必要だと著者は主張する。

シン読解力をつけるには小学校ではどうすればいいのか。著者は、教科書の文章をまず音読し、そして学習内容のポイントを視写することで教科書が読める力を培うことができるという。そして、教科書の読み方には「学習言語」の理解が重要であると説く。教科ごとに「日常言語」とは異なる「学習言語」があり科目ごとの読み方が違う。それがわかれば、教科書が読める。

シン読解力の土台は、子どもの語彙力と生活経験である。これは学力研のいう「見えない学力」にあたる。

音読、視写、語彙力、生活経験(見えない学力)、すべて学力研のキーワードではない

いか。

リーディングスキルテスト(RST)とは

RSTは「知識や情報を伝達する目的で書かれた自己完結的な文書」を「自力で読み解く力」を測るテストである。コンピュータで出題される文系、理系の問題で、その分野の知識がなくても、文章が読めれば解けるように設計されている。「係り受け・照応解決・同義文判定・推論・イメージ同定・具体例同定」の6つの領域で判定する。正答するとさらに難しい問題が出題され、受検者が同じ問題を解くというわけでない。「ちゃんと読めれば誰でも正解できるはず」の問題である。

RSTは学力と高い相関があり、中学校までは成長につれてRSTの得点は上昇するが、高校になればシン読解力の伸びは止まる。それは、シン読解力を改善するノウハウが学校教育に存在しないからである。

著者は、その原因を生活言語と学習言語のちがいにあるのではないかと推論する。学習言語は教科ごとに特徴があり、生活言語を獲得していても自動的に学習言語が習得できるわけではない。学習言語を習得で

きていないから、その教科の教科書を読めずに内容を理解できない。そのことを意識しながら教えることが効果的だという。

また、「課題内在性認知負荷」(課題の自身)に対応できない子には、いかにそれ以外で掛かる「課題外在性認知負荷」(先生の話を集めて聞き指示されたページを開く、教科書の文章から語句をさがすなど)を下げるかが大事だと著者は指摘する。

若干の疑問

新井氏の主張には全面的に賛同するが、RSTの問題設定には若干の疑問がある。

本書には新聞が読めない大人たちという章があり、新聞記事がリーディングスキルテストとして出題されている。新聞記事は字数が限られていることや記事を書いた記者の文章力があるので、テストにはそぐわない文章もあると思う。省略された主語や目的語を入れることができれば(字数制限があるが)わかりやすい(誤読のない)文章にすることはできるはずである。

また、新聞の記事は、見出しを読み、その記事をざっと目を通して内容を理解できるように書かれている。そんな新聞記事を

精読しなければ解けない「リーディングスキルテスト」の問題にし、正答率が低かったと分析することにやや疑問を感じる(問題を解けなかった言い訳と思われそうだが)。

このような疑問を書くと、字数に制限がある新聞記事であっても厳密に内容を理解しなければならない。だから、あなたには「シン読解力」が足りないのですよと新井氏に言われそうである。

また、高校生より教員の正答率が低いという記述もあるが、教員のレベルは自分も含めてそんなものだろう。決して驚くことではないと思う。

おわりに

世の中にAIが普及し、タブレットを使った授業が広がっている学校現場で必要なことは、教科書の内容を正確に理解する力であり、その力は教科書の音読と視写で培われ、その土台として語彙力と生活経験が大事であるというのが筆者の主張である。

最新(流行)のデジタルを使いこなすには従来(不易)のアナログの学習方法が大切で必要なのである。

岡本だより 8月

◇学力研最新情報 岸本ひとみ

●暑い大阪、熱い参加者

夏の全国フォーラムは、熱かったです。まずは、久々の対面集会だったので、参加者の方の学びたいという気持ちがいよいよ伝わってきて、熱かったのです。

記念講演者の宮口幸治さんのお話も熱かったです。「できないことが多様性ではない、同じようになりたいと願っている。できるようなってからの多様性だ。」という発言です。認知の歪みからくる、学習しづらさを、具体的な事例とともに、わかりやすく伝えて下さいました。

そんな子どもたちへの適切なトレーニングの機会がないことに、胸が痛くなりました。「どの子どもでできるようにしたい」という基本を忘れていないことに、うすら寒さを感じました。宮口さんの熱い言葉の裏側にある、何とかならないかという願いに応えられる教師であり、学力研でありたいと思います。

●8月からが新年度

学力研の年度は、8月始まりです。正確に言うと、夏の全国フォーラムを区切りにして、単年度としています。つまり、この「学力研の広場」は、2024年度の最終号で、9月号は2025年度の年明け号ということになります。

今年、年会費をいただく会費制を復活させました。会員の方は、オンライン講座は無料で参加いただけます。また、対面講座や学習会では、お得な割引利用金で参加いただけます。

- ・4月～全国フォーラムまで入会 4000円
- ・全国フォーラム～3月まで入会 2000円

今からですと、2000円で、1回1000円のオンライン講座が無料です。つまり、2回で元が取れるということです。さらに、対面学習会も割引になりますから、とってもお得だと思いますよ。ぜひ、入会下さい。

◇事務局だより 岡本 美穂

●全国フォーラムありがとう(ございました)。

記念講演「『頑張れない子』をどう導くか」立命館大学 宮口幸治「ケーキを切れない非行少年」「コグトレ」

・IQ75から85の子は、特別支援学級で指導も受けられず通常学級の中でほうっておかれ、勉強についていけず非行に走ってしまう可能性がある。

←
・こういう子たちの学力、運動機能、社会性は今の学校教育では育てることはできない。点繋ぎができない、形を写すことができない、↓コグトレの訓練を3年続けることで、「自分で考えるようになる」「自分をコントロールできるようになる」

・こういう子たちには100マス計算を無理やりさせると計算嫌いになる(※この場でそれを言うか...とちよつとびつくりしました。学力研のいいところの一つは、これを言ってもゆるされちゃうことだなあと思いました) 傷つけないように、点繋ぎから。

113名のご参加でした。

●19期「先生のための学校」

9月13日(土)
講座A 計算
講座B 学級づくり授業づくり(低学年)

講座C 久保齋の講話と講座
<https://www.kokuchpro.com/event/7248dab6831af571390352e97ec7043/>
今までの感想より

・本日は、ありがとうございますでした。生活指導がしんどい学校で、毎日、何をしているのか分からない日々を、過ごしています。壁がないと、成長しないし、パワーも出ない。自発性、自主性は自由保育ではない、まさしくその通りで、本校のある学年は自由保育ながら、保護者の協力も得にくく、疲弊しています。が、今日の講座のおかげで元気が出ました。本当にありがとうございます。

・先生のための学校で改めて学び直すことがたくさんあります。☆ぜひ参加してください☆

学力研カレンダー

《各地のサークル・部会 2025年 8月 例会、イベント》



どなたでもご参加いただけます。お誘い合わせのうえお越しください。お待ちしております。

※会場等使用状況により、変更の可能性もありますことをご了承ください。

8/

- | | | |
|---------------------|-----------------|---------------------------|
| 22 (金) 春日井学力研 18時半～ | レディヤン春日井(JR勝川駅) | 山口 080-6904-1697 |
| 29 (金) いろえんぴつ (加印) | 18時半～ なんなん広場会議室 | 岸本 090-9117-6330 |
| 30 (土) 大阪教育サークルはやし | 午後 エルおおさか | 荒井 aik28501@bca.bai.ne.jp |

オンライン開催のサークルには、参加方法を連絡先にお尋ねください。

下記サークルも活動していますので、翌月以降の日程のお尋ね等のご連絡下さい。

- 伊丹学力研 18時半～ ※阪急武庫之荘駅近く 前田 090-9715-3830
- みなみ学力研 9時半～12時 阿倍野区民センター 図書 nobu580701@yahoo.co.jp
- 持ち方書き方研究会 ライン会議で行います。日時や参加のしかたはご連絡を 前田 090-9715-3830

《全国キャラバン等 今後の予定》

- 1年生講座 第6回 8月23日(土) オンライン
- 第19期 先生のための学校 9月13日(土) たかつガーデン

(詳細はメルマガ「まぐまぐ」、「こくちーず」などで)

(講師派遣希望、サークル情報などは 事務局へ 079-426-5133)

ご意見・ご感想は下記まで

- | | |
|-------|-------------------------------|
| 荒井 賢一 | E-mail aik28501@bca.bai.ne.jp |
| 李 詩愛 | E-mail iwamotoshie@gmail.com |
| 堀井 克也 | E-mail katsuya4k1h9@gmail.com |
| 加藤 英介 | E-mail hgtrd533@yahoo.co.jp |